みつかる。つながる。よくなっていく。

毎月10日発行　第815号（通巻1319号）

東京YMCA 9 2024

創立1880年

〒169-0051
東京都新宿区西早稲田２-３-18
日本キリスト教会館６階
Tel　03-6302-1960
URL　http://tokyo.ymca.or.jp
発行所　公益財団法人
東京ＹＭＣＡ
発行人　菅谷 淳

東京ＹＭＣＡの使命　東京ＹＭＣＡは、イエス・キリストによって示された愛と奉仕の精神にもとづいて、青少年の精神、知性、身体の全人的成長を願い、地域社会に奉仕し、公正で平和な世界をつくるための運動を展開する。

夏の体験を経て成長した子どもたち

ＹＭＣＡキャナルコート保育園・ＹＭＣＡオリーブ保育園・ＹＭＣＡ保育園ねがい ３園合同山中湖キャンプ　実施レポート

今年もたくさんの子どもたちが東京ＹＭＣＡのサマープログラムに参加し、楽しい非日常的体験を通して心身共に大きく成長しました。

保育園でも、夏の子どもたちの成長は目を見張るものがあります。

認可保育園の３園合同山中湖キャンプは、日常の保育や友だち関係の積み重ねをもとに、子どもたちの好奇心や独創性、保育者の創意工夫などが集まって行われました。このキャンプで、かけがえのない時間を過ごし、一回り大きくなった園児たちです。

喜びにあふれる瞬間

キャンプのねらい

認可保育園であるキャナルコート保育園、オリーブ保育園、保育園ねがいの３園合同山中湖キャンプが７月に実施されました。３園合同での実施は今年で２度目、対象は５歳児です。昨年の経験を生かし、今年は３園共通のキャンプのねらい（目標）を以下の二つに決めました。

①豊かな自然の中で五感を使って、好奇心や探求心を育む
②共に生活するなかで仲間の存在に気づき、互いを認め合う

このねらいには、「東京ＹＭＣＡ保育者の心得12」に基づき、「神様が与えてくださった自然の中で、子どもたちのいのちが輝く２日間になるように」という祈りを込めました。

今年は、日頃から子どもたちの成長を見守り、保育園で働く大人たちに方向性を示してくださっている公認心理士の光真坊浩史先生も参加してくださり、そばで子どもたちと私たちを支えてくださいました。

３園みんなで朝の集い

自然とのふれあい

非日常である山中湖センターで、子どもたちは雨の中でも天気を憂うことなく、広いグラウンドで水しぶきを上げながら走り回り、水たまりでスライディングしたり、落ちている木の実などを夢中で探したりしました。また、見たことのない大きなカタツムリを見つけ、その軌道を頭を寄せ合って観察したり、初めて見る虫を見つけては図鑑で調べたりする中で、自然とのつながりを深め、自分と同じように「虫も木の実も与えられた生命なんだ。」と感じているような瞬間がありました。

心の動く瞬間

ボルダリングやカヌーなどのプログラムも山中湖キャンプの魅力です。「カヌーはやらない」「ボルダリングはやらない」などと言っていた子どもが、友だちの笑顔が輝く姿と、保育者や友だちからの励ましを受けて挑戦しました。怖かったけど「頑張った」、やってみたら「できた」、「おもしろかった」経験。そして思い通りにいかなくて気持ちが崩れた時に家に帰りたくなった「不安」など、困難にぶつかった時にどう乗り越えるか？その姿の背後に、今までの園生活がしっかりと感じられる瞬間でした。

子どもの育ちを支えるキャンプ

保育園は生後57日目から小学校入学までの子どもたちが過ごします。入園した乳児期から保育者のさまざまな援助に支えられ、園に来れば好きな遊びがあり、気の合う友だちと一緒に生活しながら、自分の居場所を見出していく場です。緊張や不安を感じている子どもたちが、毎日の園生活の中でその子なりに安心して自分らしく過ごしていけたら、と大人が知恵と力を出し合って育ちを支えています。そういった日常の園生活の延長線上に、山中湖キャンプを実施しています。就学前の最終目標とも言えるかもしれません。

成長の喜び

暑い夏を過ごし、一歩踏み出すこの時期、子どもたちの遊びや仲間関係に変化が見られます。コミュニケーションを通して自分の興味や関心を共有する心地よさを感じ、仲間との楽しい時間の中で葛藤も経験しながら挑戦や工夫をくり返していきます。達成感や人と関わることで自分の生活が豊かになるという経験を積み重ねているのだと感じました。

保育園での日常生活を土台に一泊二日の非日常を体験し、子どもたちがさらにたくましくなり、自信をつけたように感じる今日この頃です。

子どもたちのいのち輝く二日間に感謝を込めて。

（ＹＭＣＡ保育園ねがい　主任　中谷　綾）

キャンプファイヤーごっこ。みんなでにじ♪

赤▽三角

今年も酷暑といわれ、エアコンがないと夜も寝られない日々が続きましたね。今の子どもたちは、夏休みをどのように過ごしていただろうか。▼夏休みといえば、ＹＭＣＡのサマーキャンプを思い出す。幼児から高校生くらいまで、ＹＭＣＡのサマーキャンプに参加してきた。ＹＭＣＡのキャンプに参加した人の中には、その後の人生に大きな影響を受けた人も少なからずおられると思う。私もその一人である。▼中学生の時、宇都宮ＹＭＣＡ（当時）で夏に行われた「アジア学院ワークキャンプ」に参加した。アジア学院は、アジア・アフリカの方が有機農業を研修する施設で、私たちは家畜の世話や、田んぼ、畑での作業を研修生に交じって体験させてもらった。夜は交流会も行われアジア・アフリカの方々と一緒にゲームをしたり、歌を歌ったり。それは「世界」と「農業」というものが非常に身近になった経験だった。同時に、飢餓と貧困も身近に考えるようになった。▼高校生になり、漠然と将来を考えるようになった時、農業と関わりたいと思い、大学は農学部を選んだ。今は種苗メーカーに勤務し、地域の農業の一助になれるよう努めている。（会員部運営委員　並木　真）

2030年を見据えて 中期計画策定委員会スタート！

2030年、東京YMCAは創立150年を迎えます。この2030年は、世界YMCAで定めたVISION2030のゴールの年、そしてSDGsのゴールの年でもあります。とても重要な意味を持つ2030年に向けて、私たちが願う社会と東京YMCAの姿を描くため、中期計画策定委員会が発足しました。

20～30代のユース世代6人を含む11人の委員が理事会で選任され、7月18日に第1回委員会がスタートしました。委員長には上田晶平評議員が指名され、東京YMCAの2030年のビジョンとそれを実現するための第1期中期計画（2025～2027年度）の策定を進めます。

第1回委員会では、「なるべく多くの人たちの声を聴き、それを計画に反映させたい」「YMCAは本来若者の団体、若い世代の自由で斬新な発想でビジョンを描きたい」「東京YMCAの使命とVISION2030を大切に考えたい」など委員会の基本方針が確認されました。

委員会は3月末までおよそ月2回のペースで行われ、ビジョンと計画を取りまとめる予定です。ビジネスチャットなどのコミュニケーションツールも駆使して、意見交換や情報共有の活性化も図ります。ぜひご期待ください。（委員会事務局：副総主事　星野太郎）

委員の皆さん（五十音順）

委員長　上田晶平氏（評議員）

押山愛紀子氏（地域福祉職員）
倉友　粋氏（広報委員）
榊原正人氏（理事）
佐渡加奈子氏（評議員）
菅谷　淳氏（総主事）
張　津氏（国際・総合教育職員）
中元美佳氏（ウエルネス職員）
松本拓也氏（同盟代議員）
宮脇由依氏（山手リーダー）
山口温子氏（教育・保育職員）

事務局

古市　健氏（本部事務局）
星野太郎氏（業務執行理事）
松本竹弘氏（業務執行理事）

能登半島地震支援活動に参加して

輪島市の要請を受けて、東京YMCAは2024年1月24日～3月31日、輪島市町野町の2カ所の避難所の運営を支援しました。4月以降は全国YMCAによる協働体制で支援を継続。160日間、約90人のYMCA関係者によってリレーされた支援活動は、輪島市との協議を経て、6月30日に終了となりました。

終了直前、東京YMCAから支援活動に参加した4人（参加者3人、引率スタッフ1人）による活動報告です。

東京YMCA社会体育・保育専門学校 職員 松原愛作（まつばらあいさく）

6月21日～23日、東京YMCA社会体育・保育専門学校生2人、山手学舎生1人を引率して、能登半島地震支援活動に参加しました。3月上旬に被災地支援スタッフとして派遣されて以来、3ヶ月ぶりの訪問でした。

東京YMCAは、1月下旬～3月末、リレー形式でスタッフを派遣して輪島市町野町の避難所支援活動を行いました。4月からは全国YMCAの協働による体制に移行し、私たちが参加した時期は富山YMCAのスタッフを中心とした支援活動が展開されていました。

3月末時点で2カ所の避難所に約80人が避難していましたが、4月以降、避難所は1カ所に集約され、今回、避難者も約15人と少なくなっていました。しかし、地震発生から約半年が過ぎた今も町の様子は以前とさほど変わらず、山肌が目立つ崖崩れ、陥没した道路、1階が押しつぶされた家屋、道路を塞ぐ倒壊した建物など、私が3月上旬に見た光景のままの印象を受けました。そのような中で、避難者や地域住民の方々は常に明るく、私たちにも気さくに笑顔で接してくださり、復興に向けて前を向いて進んでいるように感じました。

この約半年間で、仮設住宅に移ったり、身内の家に引っ越したりと新たな生活を始めた人も増えていますが、完全に復興するのはだいぶ先のような気がします。

今回、3日間という短い期間でしたが、改めて人に寄り添い、「人のために何ができるか」を考える機会となりました。1月下旬から続くYMCAの支援活動リレーを2回も担えたことを、大変誇りに思います。

最後に、再び支援活動の機会を与えていただいたことに深謝すると共に、能登半島被災地の1日も早い復興をお祈り申し上げます。

東京YMCA山手学舎 舎生 李乘蓉（りひょうよう）

支援活動に参加した3人
（左から李さん、関澤さん、遠藤さん）

今回の能登半島地震支援活動に参加して、私は多くのことを経験しました。初めて羽田空港から飛行機に乗ったこと、初めて学校に泊まったこと、初めて避難所活動に従事したことなどです。しかし、最も重要な経験は、初めて地震後のひどい光景を見たことでした。

想像していた支援活動とは異なり、家屋の残骸の片付け作業はなく、避難所での受付やトイレ掃除などでした。空き時間には避難所周辺を散歩しましたが、至る所に倒壊した家屋があり、目を覆う光景が広がっていました。廃墟に散らばる漫画雑誌を見て、地震前にここで幸せに暮らしていた家族の姿が思い浮かび、地震の恐ろしさをより現実的に感じるとともに悲しみを覚え、被災者の方々に深い同情を感じました。

車で輪島市街地の様子を見に行った時は、さらに大きな衝撃を受けました。テレビで報道される犠牲者や被災者の数が単なる数字ではなく、その裏に一人ひとりの人生や家族が隠れていることを感じました。しかし同時に、再建された多くの道路、整理された大量のゴミ袋、そして清掃作業を続ける人々も目にしました。地震直後の能登を支援してくださった方々がいなければ、今回の私たちの活動はあり得なかったと感じました。

また、能登で出会ったすべての人々は親切で、道で出会った我々と挨拶を交わしてくれました。これは東京では経験したことがありません。能登では、地域の人々が非常に団結していて、互いの関係がとても密接でした。避難所で出会った方々は楽観的で、おしゃべり好きで、一緒にいるのがとても楽しかったです。

能登での数日間、聖書の教えである「互いに愛し合う」という感覚を実感し、自分が普段なぜ他人を愛することができないのかを反省しました。支援活動を通じて、他人に奉仕したい気持ちがさらに強まりました。これからは、もっと多くのボランティア活動を通じて、手伝いが必要な人々を手伝いたいと思いました。

東京YMCA社会体育・保育専門学校 2年 遠藤菜々葉（えんどうななは）

私たち「コミュニティー活動ゼミナール」は、能登半島地震支援活動のボランティアに参加しました。避難している人たちの力に少しでもなれたらと思い、羽田空港を出発しました。

瓦礫撤去のような肉体労働も覚悟していましたが、受付業務、換気、トイレ掃除、ラジオ体操、お弁当配布など、屋内の活動がほとんどでした。避難されている高齢者とトランプをしたり雑談をしたりする時間もありました。また、避難所周辺の様子を見に行く機会もありましたが、潰れた家屋、建物、土砂崩れなどを見て、テレビで見るよりかなりのショックを受けました。一瞬で家が潰れ、大切な人も一瞬で失う怖さを改めて痛感しました。

今回の活動に参加して嬉しかったことは、たくさんの「ありがとう」という言葉をいただいたことです。避難されている方々は大変な状況に置かれているにも関わらず、「東京からわざわざ来てくれてありがとう！」と言ってくださいました。私たちの活動や「力になりたい」という思いが避難者の支えになってくれたのであれば嬉しいです。また、外を歩いていると、地域住民同士の仲の良さだけでなく、東京から来た私たちに気さくに声を掛けてくださる人の温かさに触れることができました。

今回、2泊3日ではありましたが、震災支援活動に参加する機会を与えていただきありがとうございました。

東京YMCA社会体育・保育専門学校 2年 関澤武流（せきざわたける）

私たち「コミュニティー活動ゼミナール」は、町野町の東陽中学校の避難所スタッフとして携わりました。まずは、この度の能登半島地震で被災された方、そのご家族、ご遺族の皆様に心よりお見舞いとお悔やみを申し上げます。

私が小学5年生の時、輪島市が舞台となったNHK連続テレビ小説「まれ」を見ていたこともあり、この度の地震に心が痛むと共に今回の活動に参加させていただけたことを大変光栄に思います。

2泊3日でしたが、避難所では物資の運搬、トイレ掃除の他、被災された方と話をして過ごしました。お互いのことや先述の「まれ」についてなど、現地の方と話をする大変貴重な機会をいただきました。この活動の前に、様々な要因で体調を崩す可能性があると説明を受けましたが、私にはそのような様子はなかったため、今後、今回のような活動が必要になった際はぜひ積極的に参加したいと考えております。

最後に、大変僭越ながら、私の趣味である俳句をもって、追悼の意と復興への願いを表します。

避難所でのお弁当の仕分け作業

能登の夜の　屋根の骸の　波斯菊（ハルシャギク）

（夕方に周辺調査に行った際、崩れた家の屋根の隙間からハルシャギクが咲いていた。ハルシャギクは初夏に咲く黄色い花で花言葉は「いつも陽気、一目惚れ」。このような状況で気付かれることすらないが、ただ一つ町を照らしているのだろうと思い作りました）

東陽町語学教育センター

アメリカ在住の高校生と交流

米国メイン州にあるNational Educational PO法人CIEE（Council On International Exchange）の日本訪問プログラムの一つとして、7月16日と18日の2日間、東陽町語学教育センターにアメリカ人高校生約80人の来訪がありました。昨年から始まった日米交流プログラムで、日本在住の同年代の仲間とゲームや雑談をしながら日本語と英語を用いて交流し、友情を育むことを目的としています。日本からは約24人が参加しました。

グループに分かれ、クイズやお箸で豆拾いゲームなど日本に縁のある遊びで盛り上がったところで、その後はフリータイムでみんながやりたいことをする時間にしました。日本人ボランティアが茶道体験を提供してくれたり、折り紙や色紙に日本語を書いてみるなど日本的な体験をする一方で卓球やボードゲーム、トランプなども人気でした。一緒に遊ぶ中でどんどんリラックスして打ち解けていく様子が見られ、「カラオケがしたい」「バスケットボールがしたい」など、やりたいことも積極的に教えてくれました。聞くと、午前中は日本語の勉強、午後は文化体験など学ぶ時間が多いそうで、YMCAで体を動かしたり、大きな声で話せるなど自由に過ごせたことがとても楽しかったと言っていました。

2時間という短い時間ではありましたが、日米の青年たちが集まり、言葉・表情・体を駆使して、「ちゃんと伝わっているかな?」「どうやったら伝わるかな?」と相手のことを考え、歩み寄る様子は、まさにYMCAの英語教育の使命である世界平和に貢献できる人の育成につながるのだと思いました。ささやかな体験を積み重ね、世界が身近になり、新しい価値観に出会い、違いを受け入れる礎が築かれることを願っています。

（TYIS AD 池田麻梨子）

総主事カフェ

東京YMCA総主事　菅谷　淳

総主事カフェにようこそ。

20年ぶりに新しい紙幣が発行されました。一万円札には渋沢栄一、五千円札には津田梅子、千円札には北里柴三郎の肖像が描かれています。偽造防止のため、世界初の回転する3Dホログラムや、肖像の周囲に緻密な連続模様を施したすき入れ、コピー機では再現が困難なマイクロ文字が採用されています。また、高齢者や訪日外国人が読みやすいよう、額面表示は大きな洋数字で示されています。

一万円札1枚を製作するコストは約20円です。この紙片がなぜ1万円の価値を持っているのか、不思議に感じるかもしれませんが、これはすべての人がこれを1万円として認め、信用しているから成り立っています。

原始社会では物々交換が行われていました。そのうちに何らかの価値を持つ商品が便利な交換手段、つまり貨幣として使われるようになりました。その代表的な商品が金でした。しかし、金そのものを貨幣とすると、純度や重量などその価値の確認に手間がかかるため、国が金貨を作りました。次の段階では、金といつでも交換できる紙幣を国が発行するようになり、その紙幣が標準的な貨幣となりました。最終的には、金と交換できるという保証も不要になり、紙幣はそのまま流通し、現在に至ります。みんなが信用している限り、たとえ製作費20円の一万円札でも1万円の価値がある貨幣としてその役割を果たしています。

ただ、必死で働いて稼いだ1万円とギャンブルで一瞬にして得た1万円とでは価値が違うように感じます。また、商品やサービスの購入費用として支払う1万円と、災害に遭遇した人や経済的に困っている人への寄付や募金としての1万円も、同じ1万円なのに何か違うように感じます。お金には色がついていないと言われますが、お金を使う人やその使い方によって色は変わると思います。

世界不平等研究所が発表した報告書「World Inequality Report 2022」によると上位10％の富裕層が世界中の富の76％を所有しているとのことです。ほんの一握りの超富裕層が、その富を分配しないことで何十億人もの貧しい人々の命が脅かされています。その溝は何年、何十年経っても埋まるどころか、むしろ広がっています。人類最大の発明の一つである貨幣経済。そこで流通するお金の色が、全ての人々にとってバラ色になることを祈りたいと思います。

東陽町コミュニティーセンター

ユースによる夏休みスペシャルダイニングを開催

7月28日、夏休みに入って間もない日曜日のお昼に「下町こどもダイニング（子ども食堂）夏休みスペシャル」を開催しました。昨年の夏休み、春休みに続く3回目の開催で、今回は高校生、大学生15人がボランティアとして参加しました。「学校でボランティア活動をしなければならない」「将来教育関係の仕事につきたい」「去年やって楽しかった」「何か新しいことを始めたかった」などと理由はさまざまでしたが、子どもたちのためにと一生懸命料理をし、一緒に遊んだり、歌ったりして楽しい時間を過ごしました。

メニューはカレー、スパゲティサラダ、スープ、かき氷。ユースボランティアが調理しました

にこやかに配食するボランティアと、嬉しそうに受け取る子どもたち

初めは緊張してなかなか声や笑顔が出ませんでしたが、徐々に打ち解け、初めて歌うYMCAのキャンプソングや手遊びを子どもたちの前で披露することもできるようになりました。いつものダイニングに比べたくさんのお兄さんお姉さんが参加してくれて、子どもたちの笑顔も倍増していたように思います。

会が終わった後には、「自分の料理したものを食べて『ありがとう』と笑顔で言ってもらい、心が温かくなってパワーをもらいました」「子ども食堂というと暗いイメージを持っていたけど、逆に幸せを分けてもらいました」「一緒にボランティアをすることで、本当に短い時間なのに離れたくないと思う友達ができました」「保護者の方とも打ち解けて話すことができて貴重な経験ができました」などの感想を聞くことができ、今後のボランティアに登録してくれた人もいました。

夏休みのたった6時間のボランティアでしたが、彼らにとって良い経験になったのではないかと思います。次回は春休みに予定しています。

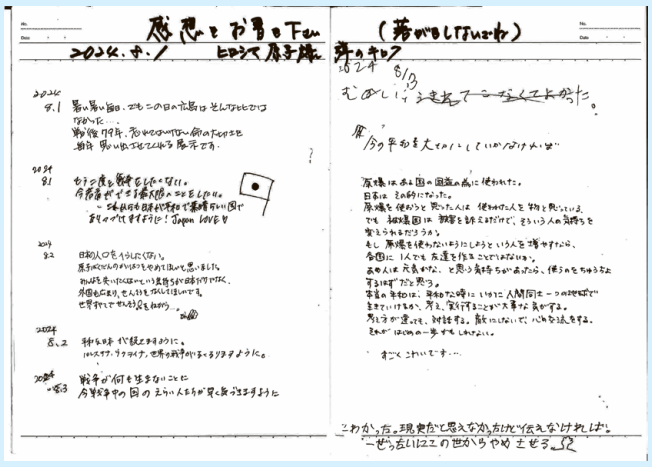
（東陽町コミュニティーセンター　沖　利柯）

平和といのちの尊さを見つめ直す

「ヒロシマ・ナガサキ　原子爆弾の記録」パネル展

東陽町コミュニティーセンターで8月1日～9日、「ヒロシマ・ナガサキ　原子爆弾の記録」パネル展を開催。原子爆弾の投下から、その被害や人体への影響、廃墟からの復興、被爆者の声などの貴重な資料が展示され、戦争のむごさと平和の大切さについて深く考える機会となりました。感想ノートには「もう二度と戦争をしたくない。今若者ができる最大限のことをしたい」「みんなを失いたくないという気持ちが日本だけでなく、外国にも広まり、せんそうをなくしてほしいです」「写真は悲惨すぎて正直目をそらしてしまった。二度と同じことを繰り返してはいけないと再認識できた」など、平和への切なる願いがつづられました。（広報室）

原子爆弾を知らない子どもも、真剣にパネルを見ていた



感想ノートに記された、来場者の平和への思い